

10月14日
感想

集会「宋継堯さんの闘いをふりかえる」に参加して

沖吉 幸子

2017年4月、天津の追悼法要旅行へ何も分からず参加させていただいたのが、安野とつながる始まりでした。中国と言えば、南京。強制労働と言えば、朝鮮。という何もわからない私が、突然ゴールまでたどるほどの旅でした。多賀さんの紹介と、川原さん、岡原さんのやさしい導きで、旅に参加させていただき、中国人強制労働について知るきっかけをいただきました。

今でも覚えているのは、天津での交流宴会で、邵義誠さんが途中から、車椅子で入って来られた時の日本人の方々の歓声です。ともに闘ってきた者だけにわかる空気を教えていただきました。

今回の集会は「和解を導いた力 Part3」です。私は宋継堯さんを、優しい顔立ちをされているのに、両目を失明されて気の毒にと思っていました。

360人の方は皆、1944年7月から1年以上もお風呂に入ることなく、服も中国から着ていたものを着替えることもできず、寒い冬も新たに服を加えることもなく、食べ物も十分に与えられず12時間もの労働を強いられたのです。戦争中といえども想像を絶する過酷な状態に言葉ありません。

その中でも、宋さんは、両目を失明されたのですから、自分一人では何もできず、死んでしまいたいとまで思いながら、助けてくれる仲間にも死んでは申し訳が立たないし、中国で待っているお母さんのためにも死ぬことはできないと思いとどまったのです。その上、仕事ができなくなった宋さんは、病気で働けなくなった12人と一緒にお払い箱にされ、早めに中国に帰らされることになったのです。帰る途中で、右目のあまりの痛さに我慢できず、自分で眼球を取り出したそうです。痛さを我慢することも、自分で眼球を取り出すこともどちらもとでもできることではないので、宋さんの強さに驚くばかりです。

中国に着いてからも、青島から宋さんの家までの100kmの距離を物乞いしながら1か月もかかって歩

いて帰ったそうです。

その後「説唱」（うたい語り）をして生活をされたそうです。十分な収入もなく、5人の子どもたちを学校に行かせられなかったし、子どもたちが失明した親がいることで差別を受けたことが宋さんにとって、一番悔しいことでした。親として子どもへの責任を果たせず、苦勞をかけてしまったと宋さんは悔やまれたのです。

1994年に、安野での強制労働について広島から市民グループが訪ねてきたとき、「私の受けた被害についてやっと話ができる機会ができました。特別な経験だから、周りに話しても理解してもらえなかった。当時の労働の状況、生活の状況を話せることはうれしくもあり、昔のことを思い出すのは悲しくもあった。」と宋さんは話されたといえます。

強制労働ということだけでもつらいのに、両目を失明した宋さんの戦後は生活が困難で、家族に苦勞をかけたことは怨んでも怨みきれないことでしょう。

宋さんが訴えた3つの要求は、①謝罪、②賠償、③記念碑設立、でした。3番目の記念碑設立を見ることなく亡くなられたことは、本当に残念なことです。

日本で戦前に行なわれたダム工事などの多くの労働を要する工事現場には、必ず中国人や朝鮮人の強制労働の事実があります。私たち日本人は、その加害の歴史をごまかすことなく受け止め、政府はきちんと謝罪をするべきだと思います。首相が代わるたびに、歴史認識が変わる日本の在り方を恥ずかしく思います。

今年は、関東大震災から100年、朝鮮人の虐殺が大きく取り上げられていても、政府は資料が残されていないと逃げています。歴史ときちんと向き合い、加害の事実を認め謝罪する。そうすることで、被害者の方々も報われ、日本も本当の終戦を迎えることができるのではないかと思います。